



避寒リゾート「コートダジュール」の誕生 (その2)

国際観光研究家 石井 昭夫
(前 帝京大学教授)

3. 19 世紀後半から 20 世紀へ

1760 年代に、イエールとニースという二つの海岸の町に、英国貴族を中心とする北ヨーロッパの上流階級のための避寒リゾートが誕生し、フランス革命前には、毎冬ニースに 100 家族程度、イエールに 50 家族程度が避寒に来ていた。しかし、これらの避寒客は主として健康への関心が第一で、リゾート滞在をエンジョイするまでには至らず、また、受け入れる側も避寒客の滞在を楽しくするような配慮まではしてこなかった。

フランス革命と、これに続くナポレオン戦争時代の中断を経て、19 世紀の中頃からコートダジュールが本格的に冬のリゾートとして拡大し、洗練されていくのだが、その第一歩となったのが、高級リゾートとして登場したカンヌであった。

1) 偶然が生んだ第 3 のリゾート : カンヌ

イエールがシャーロット・スミスの小説で英国中にその名が知られ、ニースがトバイアス・スモレットの名前と分ちがたく結びついているように、カンヌは英国政界の大立者であった政治家ヘンリー・ブローガン卿 (ホイッグ党の重鎮、閣僚、上院議長など歴任、奴隷廃止運動の先頭に立った) と切り離すことができない。事の起こりは次のような具合であった。

コレラで足止め 1834 年 11 月、ブローガン卿は、陸路イタリアへ行く途中、当時伊側にあったニースの少し手前の国境で、コレラの検疫で足止めされた。プロヴァンス地方でコレラが流行していたからである。一般旅行者並の扱いしか受けられないと知って怒り心頭に発し、ニースで避寒中の英国人に口を聞いてもらって通過しようと考えたが果たせなかった。この時まず、国境に近いアンティープで待機しようとしたが、宿屋がお粗末過ぎたため、ましな宿があるカンヌまで引返した。結局この土地が気に入って、ロンドンには戻らず、海岸地帯で冬を過ごすことにした。最初はさるシャトー (邸宅) を買って住むことを考えたが値段が折り合わず、年明けの 1 月、海岸からは離れ、今日の国道 7 号線からも 200m ほど北側、カンヌ旧市街の西に広がるクロア・デ・ガルドの丘をほとんど丸ごと 14,000 フランで買い取って、邸宅を建てることにした。彼はこれまでイタリアに何度も行って多くのイタリアの建築を見ていたため、自分でルネッサンス様式の建築を選び、大宴会場を擁する 2 階建ての豪邸を設計させた。建築家を雇い、予算を決め、工事を発注して、春にはロンドンに帰って行った。1835 年の冬に工事はほぼ終わっていたが、その後何年もかけて手直しが行われ、鉄柵で囲まれ、広い車寄せのある大邸宅エレオノール＝ルイーズ荘が出来上がった。彼は生涯この地を愛し、政治の第一線から身を引く事情もあって、毎冬憂鬱な霧のロンドンを去って避寒にやってきた。当時のカンヌは、人が住む通りが 2、3 本しかない人口 3,000 人ほどの漁村に過ぎなかったが、ブローガン卿の別荘建設をきっかけ

けに英国人避寒者が集まりはじめ、以後コートダジュールきっての高級リゾートへと変貌していく。ブローガン卿は地位と富を背景にカンヌの発展に尽くし、いつしか「カンヌのコロンブス」と呼ばれるようになり、《カンヌ発見者》の銘のある銅像が今も海岸の国際会議場前に立っている。

この逸話の真偽を追及したボアイエは、1834 年以前にここで避寒生活を送った英国人はいないことを確認する一方、カンヌ発見者の名誉を競うフランスの作家プロスペル・メリメ（1803～1870、「コロンバ」や「カルメン」の作家として知られる）も、同じ年にカンヌを訪れた可能性があるが、これは史跡監督官時代に遺跡の調査に来たのであって、彼が初めてカンヌで冬を過ごしたのは 1854 年であることを突き止めた。メリメも生涯カンヌを愛し、毎冬やって来て、カンヌの英国人の避寒生活について友人宛に沢山の書簡を書き送っている。メリメは英国に住んだことがあり、英語も話し、カンヌの英国社交界に早くから出入りした数少ないフランス人のひとりであった。

リゾート・カンヌの離陸 メリメの証言によると、1856 年には、ブローガン邸を真似た立派な邸宅が 50 軒も軒^{のき}を連ねていたという。前出マルク・ボアイエ「南仏の冬:コートダジュールの創造」のカンヌの項には、鉄道開業直前の 1860 年までに建てられた目ぼしい避寒者の邸宅 13 軒が列举され、所有者、地区名、建築年、建築様式、その後の変遷から現状までが書き込まれている。ブローガン邸を含むいくつかは写真入りである。ホテルのように広大な建築であり、地元の所有になる賃貸用物件も 3 軒取り上げられている。この時点では、のちに中心地になるクロワゼット大通り一帯は無人の海岸に過ぎなかった。殆どの別荘が西地区といわれる新開発地にあり、ここが英国人避寒客だけのコロニーになっていた。1860 年以降、鉄道が開設されて急速な発展が始まり、「至るところ英国人だらけ」という状況になり、やがてイエールを凌ぎ、ニースと競う存在になっていく。

とはいえ、何もなかった漁村の周辺に造成された避寒地だったから、1865 年までは滞在のためのインフラというべきものが何もなく、町の清掃なし、街灯なし、水道なし、辻馬車なし、劇場・図書館などの施設はむろんなかった。医者は 4 人しかおらず、不動産や銀行などのサービスもなく、仕出し屋も 1 軒しかなかった。1860 年代を通じて、避寒滞在先ならイエールかニース、コートダジュール以外ならポーやエクス・アン・プロヴァンスやピサなどが話題になることがあっても、まだカンヌを挙げる者はほとんどなかった。それが、10 年後の 1875 年には、上記を含む都市の利便性を全て備えていたというから、いかに急速に発展したか想像できよう。

ちなみに、カンヌの避寒客は 1855 年に約 100 人で、その 4 分の 3 が自前の別荘に滞在していた。10 年後には 1,500 人に急増し、その 5 分の 4 が別荘滞在者であった。1868 年 1 月 8 日現在の滞在客のうち国籍が判明している 805 家族 2,164 人について見ると、英国人が 410 家族 1,300 人で全体の 60%を占め、フランス人が 260 家族 500 人で 23%、残りが 135 家族 364 人で 17%となっている。英仏人以外では、スイス人 25 家族 70 人、ロシア人 22 家族 60 人、アメリカ人 21 家族 60 人が主なところであった。

1878 年には 2,500 人にまで増えているが、この時期には賃貸が増え、別荘を建てる人は減っている。

療養より社交 カンヌの冬の支配者になった英国人の社交ぶりについて、ボアイエが、メリメの書簡をもとに紹介している。英国人たちは、カンヌに出現した新しい英国人街を散歩したり、時に遠出もしているが、ここの避寒客の最大の関心事は宴会^{レセプション}であった。王族を始めとする高級貴族が代わる代わる催す宴会に、コロニーを挙げて参加する。中でもブローガン邸でのそれは別格であった。1861年10月11日に英国のプリンス・アルバート（ヴィクトリア女王の夫君、第1回のロンドン万国博を開催したことでも知られる）が亡くなった時の宴会には、ブローガン邸に英国人社会の全員が集まったという。発端がそうであったように、カンヌは療養地であるよりも、むしろ健康者の避寒リゾートなのであった。

交通の整備：港・道路・鉄道 避寒者たちはカンヌの整備のために自ら努力を惜しまなかった。ブローガン卿はカンヌに別荘を建てると同時に、町長に何か出来ることがあればお手伝いすると申し入れている。初仕事は港の整備で、ブローガン卿の主導で技術者を集め、設計し、1838年に工事に着手して3年間で完成した。それ以前の3年間にカンヌ港が受け入れた船舶数は合計473隻であったのに対し、新港完成後の3年間の寄港数は1,670隻に跳ね上がっていた。

次は道路だった。鉄道はマルセイユまでしか来ておらず、マルセイユからカンヌまで今日の国道7号線とエステレルの崖道を通って、乗合馬車で26時間もかかっていた。さらにカンヌからニースに行こうとすると、アンティープに抜ける峠道が難所だった。町当局の希望は、内陸部を通る国道のほかに、海岸沿いにもう1本道路を作ることであった。ブローガン卿らはこの企画を後押しして借款を成立させ（1848年）、カンヌを基点とする海岸沿いの道をニースまで通し、最終的にはマントンまで通す計画であった（ニース～マントン間は、今日崖道を3本走るコルニッシュ道路の一番下に当たる）。1860年頃に開通し、この海岸道路を通行することによって目の前に地中海の景観を一望でき、避寒客も地元民も海の青さを改めて見直したのであった。これこそが、カンヌの避寒客のひとりリエジャールをして、「コートダジュール」の呼名を導く遠因となったのである。

ナポレオン3世は、出来るだけ早くイタリア国境のマントンに至る地中海に鉄道を敷設したい考えであった。当初案は、最短距離の内陸部を通すことになっていた。ところがカンヌ近郊のフレジュスから先は、避寒客の便も考えて海岸沿いのコースに変更になった。計画によると、線路が避寒客の別荘が並ぶカンヌの郊外より海寄りを通ることになってしまう。大いに揉めたが、ブローガン卿は経済合理性を求める鉄道会社の言い分を認め、率先同意した上で、それぞれの別荘から1本ずつガード下の通路で海への道を確保するとともに、充分の補償金を獲得して決着した。しかし、ここで海岸線に接近した鉄道は、カンヌの市街の発展の方向を制約することになった。結果として西への発展がブロックされ、開発は東の海岸に向かうことになったのである。

ともあれ、1863年にヴァール川の手前まで鉄道が開通し、パリからカンヌまで20時間で来られるようになったことは、その後の発展への大きな刺激となった。

クロアゼット大通り 西地区に英国人避寒客が集まっていたが、鉄道によってそれ以上西に展開出来なくなった結果、英国人以外の避寒客を中心に、何もない港の東側の砂浜地区に別荘が建てられていく。町当局は1853年からこの砂浜地区に遊歩道をつくる計画を進めていた。当初5m幅ほどの遊歩道計画であったが、これでは不十分と考え、海沿いに堤防を築き、広々とした車道と遊歩道を合わせた並木道を建設することとした。鉄道建設工事で

出る残土等を利用して一石二鳥であった。町長は、未完成だった 1869 年に新道路を「皇后大通り」（ブルーバール・ド・ランペラトリス）と名付けたが、1872 年に完成した時にはナポレオン 3 世が失墜していたため、名前をもとのクロワゼットに戻している。そのあと、このクロワゼット大通り沿いに一流ホテルの建設ラッシュが起こり、カンヌの地位は一段と上がっていく。

カンヌのホテル 当初は貴族の豪邸建設で避寒地が形成されたのだが、人の往来が増えることによってホテルも出来てくる。記録によれば、1857 年には 3 軒の小ホテルがカンヌの町中にあるだけだったが、1859～63 年にクロワゼット地区にグレイ・ホテル、ミディ海岸にプリンス・ホテル、英国コロニー内にベルビュー・ホテル、北側のカネ地区にも 2 軒でき、異なる地区に計 5 軒のホテルが建てられた。1861 年に出来たベルビュー・ホテルは 6 階建ての威容で、英国地区のど真ん中に、避寒客の長期滞在用として建てられたものであった。しかし、その 3 年後の 1864 年にクロワゼット地区に建てられたグランド・ホテルはさらに人々の目を奪った。海に面した 70m もの幅の正面を持ち、150 の客室、25 の宴会場を擁し、内部装飾はルーブル宮もかくやという豪華さで、快適な避寒生活を保証するサービスも揃っていた（このホテルは現在はない）。このあと、クロワゼット地区を中心にホテル建設ブームが到来し、カンヌは益々デラックス化、高級化していくのである。

2) その後のイエール

英国貴族の避寒地として先行したイエールとニースは、ナポレオン戦争の時代に中断したあと再び栄光を取り戻し、次第に他の町や村を巻き込んでコートダジュールを形成していくのだが、その発展のあり様は同じではなかった。

イエールは、当初から病弱者のための保養地、ないし健康回復のための転地療養の適地としての知名度が高かった。そのイエールの人気の後押しをしたのが、18 世紀から 19 世紀にかけての診断医学の進歩であった。脈拍を測り、熱を測り、聴診器が考案され、打診による診断なども生まれた。様々な症状から病気を診断することが可能になり、新しい治療法も発見されていく。そうした時代の進展に対応して、イエールでの避寒生活も、単なる温暖な気候や珍しい植生への憧れだけでなく、病気治療への期待が一段と高まり、金持ち階級の来訪を促進した。しかし、フランスの七月王政がスタート（1830）する頃までは、市街地は汚いままであり、避寒客への配慮は不十分のままであった。1830 年以降になると、旧市街の外側にできた避寒客たちの新市街が町の中心になっていく。その過程で町の美化にも取組まれるようになり、地元資本による庭付きの快適な貸別荘なども作られる。100 ヘクタールほどの面積に 18,000 本もあったというイエール名物のオレンジの木を筆頭に、ざくろ、桃、杏、梨、苺などの果樹のほかに、多品種のバラ、ゆり、フリージア、黄水仙、などの花々が育つ庭付きの家が避寒客を楽しませた。短期の客が利用する 2 軒の立派なホテルも建てられた。

かくて、イエールは健康回復の療養地としての性格が強調され、避寒客に肺結核患者をはじめとする病気の人が多かった。彼らは散歩し、景観を眺め、出会い、情報を交換したりして穏やかな日々を過ごし、結果として、町に娯楽のためのサービスを求める方向に進まなかった。

試みが全くなされなかったわけではない。1854 年には、スイス人企業家がカジノや馬車道の建設、夏向けの海水浴施設の設置まで提案しているが、資金が集まらず頓挫している。

1860年に鉄道が開通した好機にも、チャンスを掴めなかった。《療養地》のイメージが足かせになったのである。イエールは病弱者の為の「フランスの温室」というイメージを維持するほうを選び、リゾートとして発展することを望まなかった。鉄道開通時の開発チャンスを逃してから、デベロッパ達の意気込みが消え、その後の開発競争の中で、カンヌ、モンテカルロ、マントン、アンティープ、サントロペといった新興リゾートの後塵を拝することになる。かくて、療養地としての名声は維持されたが、それゆえに、1930年代に冬の避寒客が途絶えたとき、決定的な打撃を受けた。イエールが誇ったホテルも、瀟洒な別荘の数々も解体され撤去されてしまうのである。

3) フランス領ニースの発展

ナポレオン退場後、イタリア領に復帰したニースにも避寒客は戻ってきた。ニースの魅力は、1821年に市が取得して整備した小高い丘の上にある城跡の木陰の憩いの場と、そこから眺める広々とした弓なりの海岸線（英国人の散歩道と呼ばれるようになる）であった。この雄大な眺めに比べれば、イエールの椰子の広場は見劣りがした。1850年代に、すでにニースは避寒地として他の追随を許さぬ知名度を有してはいたものの、1860年にニースがフランス領になり、1864年に鉄道が開通するまでは、大きな発展を遂げるには至らなかった。

ニースへのアクセス とにかく交通が不便だった。ピエモンテの首都トリノとニースを結ぶ峠道は乗用馬車が通れず、また、ディーニュ（オートプロヴァンス県の県都、ヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」の主人公ジャン・バルジャンが銀器を盗む舞台となった町として知られる）からカンヌへ抜ける街道が乗用馬車の通れる道になるのも、1859年を待たなければならなかった。避寒客のニースへの交通は、既述のとおり、マルセイユから山道を26時間かけてカンヌに至り、カンヌからさらに難路をヴァール川（ニースの西郊外を流れる川）まで来るのだが、ヴァール川にかかる木橋が洪水でよく落ち、通行不能になることも多かった。パリからマルセイユまではフランスの基幹交通路で、早くから汽船の利用、鉄道敷設（1856年にパリ〜リヨン〜マルセイユが全線開通）などの文明の恩恵を受けていたのに比べ、マルセイユからニースへ至るルートの交通の不便さは、住民にとっても避寒客にとっても、我慢しがたいものになってきていた。

「南仏の冬：コートダジュールの創造」に掲載されているニースへの避寒客の統計（1851～62）によると、鉄道開通前の1862年3月時点の避寒客数は、英国人367家族、フランス人443家族、ロシア人214家族、その他353家族、合計1,377家族となっている。シーズン全体では1,680家族、合計4,500人ほどであった。フランスの上流階級の間にも、コートダジュールでの避寒が浸透してきたことがうかがわれるが、全体数も国籍の構成も、それぞれ増減はあるが、過去10前間にそれほど大きな変化はない。

フランス領への編入 ニースを発展の軌道に乗せたきっかけが二つあった。一つは、イタリア統一戦争との係わりの中で、1860年、フランスがサルディニア王家からニースを含むサボイ地域の大半を取得したことであり、もう一つが鉄道の開通であった。フランス領に編入されたことは、フランス政府がニースの開発に責任を負うことを意味し、積極的な政策によってニースは見違えるようになっていく。ニースは、新たに設置された海岸アルプス県 Département des Alpes Maritimes の県都になった。劇場では当然フランス語の演劇が上演されることになり、編入の年、女優マリー・ドーブラン（ボードレールの恋人であったこ

とで有名)とともにニースに滞在していた詩人・劇作家のテオドル・バンヴィル書下ろしの「フランス領ニースを祝す」が上演され、もちろんマリー・ドーブランがこれに出演した。

フランス政府とニース市は、編入後ただちに翌年のシーズンに備えて避寒客対策に乗り出し、新知事は次々に条例や取締規則をくり出した。カーニバルに関する条令を定め、乞食行為を禁止し、避寒客にサービスを提供する馬車の御者、ポーター、その他の職業の料金を公定した。ナポレオン3世が約束していた新市街の開発美化工事も次々に着手された。川岸通りのケ・サンジャン・バプティストの改修工事、海岸のプロムナードの26m道路への拡張と美化工事、新市街の並木通りとブルーバールなどの街路整備が図られていった。

鉄道の開通 かくて受け入れ体制の改善が進みつつあったニースに、ようやく鉄道が到来する。フランス領になった1860年の時点で、鉄道はニース西方100km足らずのレザルク Les Arcs 付近まで来ていた。ニース側は2年後、すなわち1862年冬のシーズンには開通すると期待していたが、土地取得の遅れや、難工事、とくにヴァール川の架橋に時間をとられ、完成したのは1864年秋だった。シーズン直前の10月17日に第1便が大歓迎の波の中に到着した。翌週にはロシア皇帝アレクサンドル2世夫妻が到着の予定になっており、ニースの人たちはそのことも大いに喜んでいて。というのは、1860年5月にアレクサンドラ先帝妃が療養の甲斐なくニースで亡くなり、以来ロシア人はニースを忌避しているのではないかと心配していたからであった。幸いそれが杞憂に終わり、鉄道開通で寒い国ロシアの王侯貴族がこれまで以上にニースに避寒に来ることが期待できたのである。

鉄道開通後のニースの発展は目覚しかった。サルディニア領時代でも、ニースは病気の療養地人気ではイエールに一步譲ったが、避寒生活を楽しむ健康者を惹きつける可能性はより高く、かつ、裕福な避寒客がもたらす経済的利益を考慮して、そのための努力も始めていたからであった。その代表的なものがプロムナード・デザングレ Promenade des Anglais (英国人の散歩道)の整備である。

プロムナード・デザングレ 海岸沿いの遊歩道プロムナード・デザングレは、最初は1821/22年冬に避寒に来た英国人司祭とその甥の発案でつくられた。趣旨は、砂利石の浜辺が歩き難く、遊歩者の足をくじく怖れがあるため、パイヨン川の河口から海沿いに、今日のメイエルベル通りまでの区間に快適な散歩用の小道を作ったのが始まりである。当時乞食が街路に沢山いることに英国人客が同情し、遊歩道の工事を行って収入を得さしめる配慮もあったのだという。人々はこの道を「英国人の散歩道」と呼ぶようになり、1844年にボーメットル通りまで延伸された機会に、市当局が正式の名称として採用した。以来、時間をかけてさらに延長され、拡幅され、美化と改善が繰り返されて、ニースを代表する景観になった。

クラブとカジノ ニースの名声は高まる一方で、避寒客はますますハイレベルになり、病弱者の割合は減っていった。元々保養・療養目的客はイエールより少なく、健康者が多い分だけ気晴らしも必要とされた。通常、避寒地でも日が暮れると冷え込むので、ガイドブックも自宅での休養を勧めていたが、病弱者が比較的少なかったニースでは、夜も外出する人が多かった。お互いに招き合ったり、外食に出かけ、あるいは夕方5時以降もモードの店(1850年以降増えていた)をウィンドーショッピングしたり、といった客が増えていたのである。1861年には、避寒客の娯楽と社交のための最初のクラブ《セルクル・マセナ》ができたが、英本国のクラブと違い、ここへは女性も出入りできた。ちなみに、後年ホテル王

セザール・リッツと組んで活躍する名料理長オーギュスト・エスコフィエ（1846～1935）は、ニースに近いヴィルヌーブ・ルーベの出身で、13歳の年から3年間、伯父が経営する避寒客相手の《レストラン・フランセ》（マセナ広場にあった）で修業したのち、1863/64年のシーズンに、17歳の初仕事としてこのセルクル・マセナで働いている。

カジノが革命前に一度提案されたことは第2章で紹介したが、1863年にモンテカルロが本格的なカジノ建設を計画していることを知って、対抗上設置を急ぎ、1866/67のシーズンに最初のカジノをプロムナード・デザングレにオープンした。だが、このカジノは、普仏戦争の影響、モンテカルロとの競争に加え、経営のまずさが相まって、1872年に破綻してしまう。海岸にあったもうひとつのクラブ《セルクル・ド・ラ・メディテラネ》が後を引き継ぐが、やはりクラブとカジノは別物であり、片手間にできる仕事ではなかった。

結局ニースのカジノ設置は紆余曲折し、市がパイヨン河口の500mを暗渠^{あんきよ}にしてその上に公園を作り、公園のマセナ広場に面して建設させた市立のカジノ（1884年開業）と、プロムナード・デザングレの東端の海岸に築いた栈橋上の英国企業のカジノ（1885/86のシーズンに開業）の二つが並立した。

しかし、フランスではカジノの規制が比較的厳しく、豪華な施設をつくって大々的に宣伝するモンテカルロに及ばなかった。ニースの2軒のカジノは第二次世界大戦前まで営業したが、栈橋のカジノは大戦中に解体され、市立のカジノは、戦争中倉庫として使われたあと再開したが、賭博は1969年で終わり、最終的に1979年に建物も撤去された。

ニースのホテル事情 馬車の時代、避寒滞在客は別荘もしくは家具付き（料理・食器用具類も完備）の独立家屋（ヴィラ）、またはアパルトマンに滞在した。ホテルは短期客用やローカルの旅客用で、ほとんど旧市街にあった。ニースの初期の発展を促したヴィラは、旧市街の外、パイヨン川の西のクロア・デ・マルブル地区と、これに繋がるプロムナード・デザングレ地区に、英国、フランス、ロシアの上流貴族の豪壮な邸宅や賃貸用の住宅が立ち並んで街路を形成していった。

ニースには、1839年当時のホテル事情を伝える「宿屋と飲食店の統計」という珍しい資料がある。当時のニースの宿を詳しく調べたデータで、当局がそれぞれのカテゴリー別に、数量が充分かどうかを判断しているのも面白い。小ホテル（アルベルギ）が13軒あり、商人など通常の旅人が利用する宿泊施設で、当局の見解は15軒に増やすべきであろうとしている。その下位の宿屋（オステリエ）はもっと質素で、農民や季節労働者などローカルの人々が利用しており、27軒あって数は充分である。居酒屋（タベルナ）は83軒もあって多すぎる。仕出し屋は14軒、カフェは26軒で、ともに充分である、といった具合である。上記アルベルギのうち、1850年に、ピエモンテ公国内の3つの地方から来るローカルの乗合馬車用の終着駅を兼ねている3軒に《ホテル》の名称がつくが、これらは旧市街にあって、農民らも泊まり、馬車到着時には中庭に荷物や手押し車が溢れる類いの宿であった。

フランス方面から来る避寒客の馬車の終着駅は、旧市街との境界をなすパイヨン川の西側に出来、そこからプロムナード・デザングレの方向に質のよいホテルが建設されるようになる。とくに、鉄道が開通してからは人の往来が増え、北の郊外に出来た鉄道駅が交通の起点になると、新市街にホテが急速に増える。しかし、鉄道開通後も最初の20年ほどは、避寒客がホテルに滞在することはほとんどなかった。ホテル数の推移を見ると、1877年に64軒の上級ホテルがあったが、ほとんどが30室未満の小ホテルで、避寒客がこれらを利用するのは、相変わらずヴィラやアパルトマンを探す間の仮の宿でしかなかった。

ちなみに、鉄道開通で避寒客層が広がり、1870 年には 2,400 家族、1875 年には 5,000 家族へと急増した。その後さらに増え、1880～1885 年の平均避寒客は 8,000 家族、人数にして 26,000 人となり、内訳は半数がフランス人、4 分の 1 が英国人、残りはロシア人、アメリカ人、ドイツ/オーストリア人の 3 グループがほぼ同じ程度であった。

ヴィラからデラックス・ホテルへ しかし、1890 年頃を境に状況は変わっていく。避寒客の使用に耐える豪華ホテルも建てられるようになり、王侯貴族といえども、わざわざそのために召使を雇ってまで自立した生活をせずとも、優秀なサービスの豪華なホテルを利用する傾向が現れる。そうになると、超デラックス・ホテルの建設ブームが到来し、1892 年に 83 軒だったホテル数が、1900 年にはいっきに 128 軒へと増えている。ピークとなる第一次世界大戦直前の 1913 年には 180 軒にまで増えたが、ニース商業会議所の資料及びベデカーのガイドブックによると、そのうち 100 軒程度が超デラックス、もしくは一流ホテルのカテゴリーであった。新築のデラックス・ホテルも、既存ホテルを増改築した一流ホテルも、狙いは長期滞在の避寒客であって、避寒シーズン外は閉めており、通過旅客を獲得する努力はしなかった。かくて、避寒客もヴィラから高級ホテルへとシフトを始め、ニースには真に宮殿（パレス）と見まがう豪壮なホテルが林立するようになる。

絶頂から低迷へ 1890 年から 1914 年までがコートダジュールの避寒リゾートの絶頂期であるが、中でもニースは、人気においても客数においても、コートダジュールの《女王》であった。しかし、絶頂期は長くは続かなかった。避寒客が消滅する直接のきっかけは第一次世界大戦と 1929 年に始まる大恐慌であるが、それ以前にもニース凋落^{ちようらく}の予兆はあった。観光地の宿命であろうが、皮肉にも鉄道が開通して便利になり、座席を埋めたい鉄道会社の PR 作戦によって、ニースは特権階級のリゾートから《民主化》へ向かう。本物の王侯貴族は、中産階級化していくニースを嫌って、コートダジュール内でも人里を離れた場所を求めたり、コルシカ島やエジプトのようなずっと南に避寒地を求めて去っていくのである。

ともあれ、第一次世界大戦は、冬の間中南仏で避寒生活をおくる有閑階級を消滅させてしまう。それでも、大戦後しばらく活況を取り戻すかのように見えたが、1925 年には早くもデラックス・ホテルの廃業が始まり、大恐慌を経て、1939 年までに豪華さを誇ったリギ、パルク・アンペリアル、ウィンター・パレス、レジーナなど 31 ホテルが閉館し、その傾向は 1942 年まで止まらなかった。

（続く）